

# 『戦術論』における公民と君主： マキアヴェッリ軍事思想の多元性の解読

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-02<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24517/00000134">https://doi.org/10.24517/00000134</a>           |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



<論考>

『戦術論』における公民と君主

—マキアヴェッリ軍事思想の多元性の解読—

石黒 盛久

— I —

軍事史上の重要性にもかかわらず、真剣な議論から零れ落ちている古典は少なくない。マキアヴェッリの『戦術論』もまた、そうした古典の一つである<sup>1</sup>。『君主論』や『ディスコルスィ』はもちろん『フィレンツェ史』の場合と比べても、『戦術論』の学問的考察の蓄積は余りに少ない。こうした事態が生じた背景には、近代の歴史研究者や思想研究者が軍事研究を賤業と見なしてきたことが考えられる<sup>2</sup>。だが近代の『戦術論』に対する関心の低さは、軍事研究に対する忌避のみに由来するものではない。マキアヴェッリによる火器や要塞建築、或いは傭兵の効用の軽視は、ヨーロッパ軍事制度発展の方向性を読み取り損ねたものと解釈され、彼の軍事論の価値に疑問符を突きつけた<sup>3</sup>。そもそも『戦術論』を一読した誰しもが感じるように、各種兵種

1 本稿におけるマキアヴェッリ著作の引用に関しては N. Machiavelli (G. M. Anselmi e C. Varotti ed.) *Le grandi opera politiche I e II*, Torino, 1992 e 1993 を底本に用い、訳文は『戦術論』については筑摩書房版『マキアヴェッリ全集』第1巻（『戦術論』澤井繁男・服部文彦訳）に、『君主論』及び『ディスコルスィ』については『マキアヴェッリ』（世界の名著16）所載の『君主論』（池田廉訳）及び『政略論』（永井三明訳）によった。

2 大久保桂子「ヨーロッパ「軍事革命」論の射程」『思想』881号（1997年）、151頁、同じく大久保桂子「軍事史の過去と現在」『國学院雑誌』第98号10号（1997年）、31～33頁。わが国学会におけるこうした傾向については鈴木直志「タブーからの脱却—戦後の西洋史学における近世軍事史研究」『戦略研究』第3号（2005年）、194頁。マキアヴェッリ研究におけるこうした側面については石黒盛久「軍事思想家マキアヴェッリ—過去・現在・未来」『戦略研究』第5号（2007年）、228～229頁を参照せよ。

3 火砲の非効率性については『戦術論』第三巻（例えば「[大砲をすこぶる重要だと]考える意見に同調する人は誰でも、思慮が足りないか、ほとんど考え及んでいなかったに違いない」といった箇所）、更には『ディスコルスィ』II-17に、要塞の脆弱性については『戦術論』第7巻（「大砲の威力といったらそれはすさまじいわけで、壁や防塁の部分で貴兄麾下に頼るものは失敗することになる」）更には、『君主論』第20章および『ディスコルスィ』II-24、傭兵の弊害については『戦術論』第1巻（例えば「私的な職業として戦争をする者どもからなる歩兵団以上に危険極まりないものはない」）更には、『君主論』第12章に言及されている。

の種々の組み合わせによる布陣法（第2巻）や行軍法（第4巻）、野営法（第6巻）をめぐる記述の煩瑣さは、読者の大半を辟易させるものに過ぎない。にもかかわらず近世全般を通じ、軍事専門家の多くがマキアヴェッリの『戦術論』に少なからぬ関心を寄せ、それに高い評価を与えてきた<sup>4</sup>。『戦術論』は1520年の公刊後、16世紀中だけでも少なくとも20回公刊され、更に多数の言語に翻訳されている<sup>5</sup>。モンテーニュは彼をカエサルやポリビオスに匹敵する軍事の天才と称揚し、18世紀に至ってもサククス元帥は『戦術論』の記述を匿名で引用した<sup>6</sup>。マキアヴェッリ存命中に公刊された唯一の大作が『戦術論』に他ならず、当時の人々が彼を軍事論の著者として認識していたこと、またマキアヴェッリが自身をかかえる存在として、世に印象づけようと望んでいたことは見過ごされるべきではない<sup>7</sup>。だが軍事思想家マキアヴェッリの神話を不動のものとしたのは、クラウゼヴィッツによる、「軍事分野において大変鋭い判断」を有していたマキアヴェッリへの賞賛であった<sup>8</sup>。

「消耗戦略」に対する「殲滅戦略」の選択、国民意識に基づく徴兵軍の建設、兵士の敢闘精神の戦術表現としての白兵戦術の重視等々、マキアヴェッリの軍事思想は一見クラウゼヴィッツに集約されるプロイセン軍事学を先取りするかに見える<sup>9</sup>。つまり彼の軍事思想の価値は以後、かかる達成からの逆算により測定されてしまうようになった。終点からの逆算の傾向はひとりマキアヴェッリの評価に止まらない。同じ逆算はフリードリヒ大王の軍事戦略に対しても行われている<sup>10</sup>。ここから我々はマキアヴェッリーフリードリヒ大王ークラウゼヴィッツという、近代軍事思想史の展開の最も通俗的図式を描き出してしまうようになる。だがデルブリュックが解明したように、現実のフリードリヒ大王は、超時代的な「殲滅戦略」の幻視家だった訳ではない。むしろ補給能力や移動能力といった当時の軍事的諸条件が彼に、「殲滅戦略」に到達することを許さなかった。時に「殲滅戦略」的な極限に漸近することがあったとしても彼の戦略は、基本的には当時の軍事思考の常識である「消耗戦略」に規定されていた。彼の軍事思想の偉大さとはむしろ、「消耗戦略」という時代の軍事行動の極を踏まえつつ、「殲滅戦略」といういまひとつの極に漸近することにより、その思考に楕円の柔軟性を加味した点にある。換言すれば彼の軍事思想の本質はその時代特殊性の単純な否定にではなく、時代特殊性との格闘を通じて、自身に内在する普遍性を自覚するに至った点にこそ求められる。

<sup>4</sup> もっともマッテオ・バンデッロがその『巷談百話』に記載した名高い逸話において、黒隊長ジョバンニに用兵家マキアヴェッリをからかわせたように当時から、マキアヴェッリの素人用兵に対する不信が存した。

<sup>5</sup> C.Lynch, "Introduction", N.Machiavelli (C.Lynch ed.), *Art of War*, Chicago and London, 2003, p. XXVI

<sup>6</sup> F. Gilbert, "L'Arte della Guerra", F. Gilbert, *Machiavelli e il suo tempo*, Bologna, 1977, p. 220. S.Di Fusco, "Le fortezza secondo Niccolo Machiavelli", *Ricerche Storiche*, XX (1990), p. 33.

<sup>7</sup> Lynch, op. cit., p.XIV.

<sup>8</sup> Gilbert, op. cit., pp. 228-229. Lynch, op.cit., P.XXVI.

<sup>9</sup> デルブリュック（小堤 盾編訳）『デルブリュック』（戦略論体系12）芙蓉書房、2008年、125～135頁。Lynch, op. cit., XXVI.

<sup>10</sup> デルブリュック前掲書、64頁、116頁などを見よ。

フリードリヒ大王の軍事思想のこの再評価は、同じくプロイセン軍事学からの逆算により価値を測定されてきた、マキアヴェッリ軍事思想についても再検討を促す。即ち彼は本当に歩兵による白兵戦闘の優位性の単純なる信奉者であったのか。要塞建築による遷延と、火炮や騎兵による機動を巧妙に組み合わせる展開された「消耗戦略」の批判者であったのか<sup>11</sup>。二度の大戦におけるドイツの敗北によるプロイセン軍事学の權威の失墜や、大量破壊兵器の進歩による「殲滅戦略」の残虐性の顕在化は、かかる再検討の契機となった<sup>12</sup>。

再検討に取り組むにあたり、『戦術論』執筆の外的状況につき確認しておきたい。1512年の失脚後サンタンドレアの山荘に籠居し、『君主論』および『デイスコルスィ』の執筆に専念していたマキアヴェッリが、『戦術論』執筆の契機となりまたその舞台ともなった「オリチェッラーリの園」(orte oricellari)の学芸サークルに参加したのは、1516年頃のこととされる。彼の参加の経緯は明らかではない。コジモ・ルチェッライにより主宰されたこのサークルは元来、『戦術論』中のコジモの発言に窺える通り、彼の祖父ベルナルド・ルチェッライの創設になる<sup>13</sup>。1498～1512年の「再生した共和国」時代、ベルナルドの政治的立場は微妙極まるものであった。1498年のメディチ政権の崩壊は、彼を領袖とする貴族層が、独裁を強化するメディチ家のピエロ2世と抜き差しならない対立に陥った結果生じた事態である<sup>14</sup>。だが彼らはメディチ失墜後の政局の指導権を握ることに失敗し、彼らの志向する「制限政体」(governo stretto)と対照的な、平民主導の「開放政体」(governo largo)の成立を許してしまった<sup>15</sup>。中でも困難な立場に立ったの

11 ナポレオン戦争以前の戦争とは結局、遷延(城塞)と機動(騎兵)を駆使した長期消耗戦の戦果を外交上の他の諸要素と組み合わせ、政治問題を外交官による戦場外の交渉によって解決することを目的とするものであった。こうした点において当時の戦争は、同じく「政治の延長」ではありながら政治の領域と軍事の領域を明快に切断し、敵の殲滅により政治問題を純軍事的に解決しようとする、プロイセン軍事学に代表されるナポレオン戦争以後の戦争観とは、全く異なった戦争観に立つものであった。マキアヴェッリにより批判されるルネサンス期のいわゆる「八百長戦争」の詰め将棋的性格もまた、当時の戦争の政治全体の文脈の中でのこうした位置づけを踏まえて、考察されなければならない(こうした近代以前の戦争の性格については、バレストラッチ(和栗珠里訳)『フィレンツェの傭兵隊長ジョン・ホークウッド』白水社、2006年とりわけその87～93頁、またGilbert, op. cit., p.207も参照のこと)。とくに16世紀以降の「消耗戦略」にもとづく戦争の諸相については、G・パーカー(大久保桂子訳)『長條合戦の世界史—ヨーロッパ軍事革命の衝撃 1500-1800』同文館、1995年の第1章第1節、W・マクニール(高橋均訳)『戦争の世界史—技術と軍隊と社会』、2002年の章を参照。これらにおいて詳述されているように、16世紀以後「消耗戦術」(城塞)と「殲滅戦術」(火器)は前者の優位のもと潜在的な技術革新競争を繰り広げており、長期的にはマスケット銃の如き小火器の発達に伴う歩兵の優位の漸次的確立を通じて、「殲滅戦略」が独立して機能する可能性が次第に高められていく。

12 石黒前傾論文、230頁。

13 『戦術論』第1巻。

14 ベルナルドをめぐるこの間の情勢についてはF.Gilbert, "Bernardo Rucellai and the Orti Oricellari. A study on the Origin of Modern Political Thought" *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, Volume 12, 1949, pp.107-109.

15 ベルナルドらの意図は、ピエロ2世に代わりメディチ分家のピエロフランチェスコ・デ・メ

は純然たる貴族政治を理想とし、平民派との妥協を一切拒絶したベルナルドである。1502年平民派の支持の下、終身大統領ソデリーニを首班とする新政権が成立したが、ソデリーニを敵視するベルナルドは政界を引退し、1506年遂にはフィレンツェより自発的に亡命の道を選ぶ<sup>16</sup>。ギルバートによればこの1502年の引退から1506年の亡命に至る時期、ベルナルドの主宰のもと「オリチェッラーリの園」の学芸サークルの第一期が展開した<sup>17</sup>。それはフィチーノのプラトン・アカデミーの衣鉢を継ぐ集いであったものの、1494年以後のイタリア政治社会の混沌を反映して、その論題を文学・哲学から歴史・政治へと転じていた<sup>18</sup>。権門子弟も数多く参加したこのサークルの関心対象の転換は、従来倫理道徳的側面に止まっていた人文主義の、実践社会的側面への応用という意味において、マキアヴェッリにおける政治学の誕生を予感させるものであった<sup>19</sup>。

## - II -

マキアヴェッリが「園」の同人となったのは、1516年前後のことと考えられる。元来ベルナルドの政敵ソデリーニの右腕であったマキアヴェッリが、ベルナルド没後とはいえ、故人の「制限政体」的政治観を継承するルチェッライ家のサークルに接近した理由は明らかではない<sup>20</sup>。

---

ディチを頂点とする、より貴族主義的新体制を樹立するところに存した (Gilbert, op. cit., p.107. また R. Fubini, "Luscita dal sistema politico della Firenze quattrocentesca dall'istituzione del Consiglio Maggiore alla nomina del Gonfaloniere perpetuo", R. Fubini, *I ceti dirigenti in Firenze dal gonfalonierato di giustizia a vita all'avvento del ducato*, Lecce, 1999, p.40 も見よ)。

<sup>16</sup> ソデリーニ政権成立の背景については石黒盛久『君主論』と16世紀初頭フィレンツェの党派政治：ピエロ・ソデリーニ政権と市民的君主政』『金沢大学教育学部研究紀要』（人文社会科学編）第57巻、2008年を参照。なおギルバートによれば大統領ソデリーニとベルナルドの関係の決定的悪化は、亡命中のメディチ家とフィレンツェ貴族階級の和解の象徴としての、同家とストロツィ家の婚姻にベルナルドが果たした仲人の役割に起因するという (Gilbert, op. cit., p.110)。

<sup>17</sup> 「諸侯の行動や、諸王の権勢への懸念にもはや心を煩わせず、彼はその花咲く庭園に引きこもり、後世のみを自当てに孤独な生を楽しんだ」 (Gilbert, op. cit., p.109. 原典は P. Crinito, "Ad Faustum: De sylva Oricellaria", P. Crinito, *Com-mentari De Honesta Disciplina*, Firenze, 1504)

<sup>18</sup> 例えばベルナルド自身、同時代史としての『イタリア戦争史』を執筆し、シャルル8世のイタリア南下がヨーロッパ史に有する意義に対し最初の着目を行っている。またベルナルド周辺の貴族の「開放政体」に依拠する現行政府への不満が、15世紀末の政体への郷愁を醸成し、結果このサークルを淵源としてロレンツォ豪華公の神話化が始まった (Gilbert, op. cit., pp.120-124)。

<sup>19</sup> Gilbert, op. cit., pp.127-131.

<sup>20</sup> ベルナルドは1511年帰国し1512年のメディチ復権に協力した（その際ソデリーニにより一時投獄されることもあった）が、1514年死去している。

考えられるのは、『君主論』の献呈によりメディチ家に接近することを断念したマキアヴェッリが、同家への接近の新たな回路として「オリチェッラーリの園」に着目したという可能性であろう。1494年の反逆にもかかわらず、1512年のソデーニ二政権打倒計画への参加によりルチェッライ家は、レオ10世を中心としたメディチ家主流派と関係修復に成功していた<sup>21</sup>。マキアヴェッリと「園」とを結ぶ媒介となったのは、フランチェスコ・ヴェットーリであったと考えられる。マキアヴェッリとの交友を深める一方ヴェットーリは、ヤコポ・サルヴィアーティを領袖とする穏健派貴族の若手として、ベルナルド時代には「園」の常連に名を連ねていた<sup>22</sup>。この経歴から見てヴェットーリがベルナルド没後も、「園」と関わりを保ち続けていた可能性は高い<sup>23</sup>。

さてマキアヴェッリの『戦術論』はコジモ・ルチェッライが、著名な傭兵隊長ファブリツィオ・コロナのフィレンツェ来訪という機会を捉え、彼を「オリチェッラーリの園」に招いた折、交わされた対話という体裁をとる作品である<sup>24</sup>。対話の陳述者はその場に居合わせたマキアヴェッリである。だが彼は陳述の開始早々、「ところで「ある人がこういった」とか、「だれ

<sup>21</sup> ベルナルド在世中の「園」の政治観こそが、以後の「ロレンツォ豪華公の神話」の淵源となった。復権後のメディチ家の政治方針は、このベルナルドに代表されるフィレンツェ貴族連との連携を模索するレオ10世ら主流派と、父ピエロ2世の政策を継承し同家への権力集中を進めるロレンツォ2世ら反主流派に分裂し、19年のロレンツォ2世の死に至るまで隠微な葛藤を繰り返した（石黒盛久「マキアヴェッリの政治観と諸階級の葛藤—〈絶対的〉君主政に関する一考察』『社会文化史学』第48号、2006年、37～40頁および「N・マキアヴェッリと『メディチ党に告ぐ』をめぐる—1512年の政変と『君主論』第9章』『日伊文化研究』XLII、54～56頁）。次に触れるように、マキアヴェッリを「園」を結びつけたのは親友フランチェスコ・ヴェットーリであるが、彼は同時にこの時期ロレンツォ2世側近としてフィレンツェ君主国化の先頭に立っていた人物でもある。拙稿「N・マキアヴェッリと『メディチ党に告ぐ』」にも論じたように、権力の中央集権化を進めるロレンツォ2世の政策は、マキアヴェッリが近侍したソデーニ二の政策を反復踏襲するものであり、『君主論』に示された新君主のモデルのひとつがソデーニ二であることと、同書の被献呈者がロレンツォ2世であることは、フィレンツェ史のそうした構造的現実を背景に置けば、ある一貫性を有するものであることが理解される。『君主論』執筆のキー・パーソンがヴェットーリであることはよく知られるところであるが、共和国とメディチ権力の間を生き抜いたヴェットーリの政治行動様式の考察は、マキアヴェッリ政治思想の含意の照出に多大の示唆を与えるものと思われる。

<sup>22</sup> 皇帝マクシミリアン1世への遣使問題が、マキアヴェッリ—ヴェットーリ間の交友の端緒となったことについてはR. Ridolfi, *Vita di N. Machiavelli (7ed.)*, Firenze, 1978, pp. 159-169. 参照。またヴェットーリの「園」第一期への参加についてはGilbert, op. cit., p. 117を見よ。

<sup>23</sup> もっとも1512年以降ヴェットーリはもはや若手ではなく、各国駐在大使等要職を歴任するフィレンツェ政界の要人の一人となり、またロレンツォ2世への奉仕に窺えるように、「園」の理想とする貴族主義的共和主義と明らかに一線を画す思想的位置に立ったため、コジモ・ルチェッライ時代の「園」の常連とは考えられてはいない。

<sup>24</sup> 「ファブリツィオ殿のような人物から誰もが望むように、ゆっくりと差し向かいで話をしながら、相手からいろいろなことを学びたいと思ったからだ」（『戦術論』第1巻）。このような対話体の採用が、フィレンツェにおける前時代のプラント主義の盛行に起因するものであるのは言うまでもない。

それはこう切り返した」と何度も繰り返す煩雑さを避けるため、相手を示さず話しての名のみを記すことにする」と語り、作品内部への自己の介入を消去し、対話の実際の時点と彼による陳述の時点との間の断層を糊塗してしまう<sup>25</sup>。それとともに注目すべきは、ベルナルドが「園」で享受した古代園芸趣味に対する、「ナポリ王国の君侯方を思い出させてくれる...このような腐敗した所業を、わがローマ人が好んでからというもの、わが祖国は崩壊してしまったのだ」という<sup>26</sup>、ファブリツィオの痛烈な批判である。他方それに対してコジモは、「祖父は古代人を遠ざけ、それほど奇抜ではない程度に可能な範囲で古代風を模倣し」ているのだと反論する。ここから本書の記述が一方では純粋な古代への回帰、他方では当世の実情に対する妥協という、二極の緊張に応じて展開したことが読み取れる。対話体という形式の採用により、このような二重三重の「揺らぎ」を孕みつつ多層的に展開される点に、『戦術論』における議論の特徴がある。むしろかかる多層性を可能にする形式として、対話体が意識的に利用されている。

このような多層性の選択の要因として筆者はマキアヴェッリ当人と、本書の読者として想定される「園」の人々との間の精神的屈折を想定したい。本来マキアヴェッリの政治思想的立脚点は、「園」の人々のそれと正反対の位置を占めるものであった<sup>27</sup>。『君主論』に典型的に示される古代的道德の伝統への過激な反抗に比し、兵士の公民道德が平板に強調される『戦術論』という作品をマンスフィールドは、最も「マキアヴェッリらしさを欠いた」作品と評する<sup>28</sup>。この書の大人しきないしは凡庸さの所以を、それが彼の在世中に刊行され、広範な世人の批評に晒されることを彼が念頭に置いた結果だと見る向きもある<sup>29</sup>。即ちかかる観点によれば、本書や『ディスコルスィ』を特徴付ける公民道德の強調は<sup>30</sup>、軍政治両面にわたる改革を担う超

<sup>25</sup> 『戦術論』第1巻。考証により、対話が行われた日時は1516年の8月末から9月初旬の間である一方、マキアヴェッリによる陳述は1519年11月2日（コジモ・ルチェッライの死）と1520年9月15日（ピアッジョ・ブアナコルスィの『日記』における『戦術論』手稿への言及）の間の出来事に仮託されている。『戦術論』がジュンティ書房より刊行されたのは翌21年8月16日。この1519年から1520年という時期はマキアヴェッリ年譜中、最も史料の希薄な時期であり、従って『戦術論』刊行の具体的事情を詳らかにすることはできない（H.Mansfield, "An Introduction to Machiavelli's Art of War", H. Mansfield, *Machiavelli's Virtue*, Chicago-London, 1966, p.191, p.194を参照。恐らく「オリチェッラーリの園」同人による反メディチ陰謀事件の出来が、彼が「園」と密接な関連を持ったこの時期の史料の意図的破棄を生ぜしめたのであろう）。

<sup>26</sup> それ故ファブリツィオは「日陰ではなく陽の下でなされたことを、過ち腐敗した古代のやり方ではなく、まったくき真実のやり方を真似る」ことの必要性を強調する（『戦術論』第1巻）。

<sup>27</sup> 中流市民層出身のマキアヴェッリが当時の社会構造の中で立身を遂げようとするれば、事実ソレリーニの下での彼がそうであった如く、中央集権的政策を施行する「君主」の腹心としてその権力の代行者となる他、可能な経路は存在しなかったはずである（『君主論』第22章）。事実彼と社会的位相と心情を共有する秘書官階級は、その前後の時代イタリア各地に叢生していた（S. Marcello, *Rinascimento Segreto: Il mondo del Segretario da Petrarca a Machiavelli*, Milano, 2004）。

<sup>28</sup> Mansfield, op. cit., p.191.

<sup>29</sup> Mansfield, op. cit., p.194.

<sup>30</sup> なかんずく「市民生活と軍事生活ほど互いに親和し、似通い、一体となっているものはない」

道徳的権力者の渴望という彼の本心を修辭的に秘匿する、目かくしということになる<sup>31</sup>。

但し、本書におけるマキアヴェッリの真意を評価する別の観点もある。ポーコックやスキナー、ヴィロリの如く彼をフィレンツェ市民的人文主義の衣鉢を継ぐ、「共和主義者マキアヴェッリ」として理解する観点である。スキナーらの議論の核とは正に、マキアヴェッリが自身の民兵主義（これこそ彼の徴兵軍構想の基盤となる）に、「市民のみが優れた兵士となり得るのであり、兵士のみが優れた市民たり得る」<sup>32</sup>という相関性を読み取った点にある。換言すれば彼らは「人はまさに軍事教練を通じて市民であることを学び、市民的力量を発揮する」<sup>33</sup>という市民社会の公民道徳を、マキアヴェッリが自身のものとしていたと考えるのである。この観点に基づきスキナーは「マキアヴェッリと古典的伝統の究極の継続性」を主張した。またヴィロリに至っては、マキアヴェッリが「古典的政治学から再生させようとしたその当のものは、彼の他の如何なる著作においてよりも『戦術論』において明瞭に言明されている」とすら主張する<sup>34</sup>。

だが自身の社会的階層が彼を拘束する条件に照らしても、また16世紀初頭にイタリア諸都市国家の国制が露呈した限界に照らしても、彼がフィレンツェの伝統的共和政体に郷愁を抱き、単にそれを復古せしめることを意図していたとする、スキナーやヴィロリの解釈の方向性には違和感を覚える。もちろん彼の意識の表層に、かかる復古の衝動が存したことは否定し得ない。しかし思想的により重要なことは、かかる衝動に規制されつつ現実との格闘を通じて彼が、中世的共和政とはまったく異なる近代的共和政へと無意識に突出してしまったことに他ならな

---

という『戦術論』序論の一句こそは、市民生活の揺籃としての軍事生活換言すれば徴兵市民軍の必要性という、『君主論』以来一貫する彼の思想の核のひとつを示すものに他ならない。

<sup>31</sup> こうした観点においてマンスフィールドがレオ・シュトラウスのマキアヴェッリ解釈を継承する立場に立つことは言うまでもない（Lynch, op. cit., p. XXII~XXIII また特にマキアヴェッリによる自身の真意の「隠匿」という戦略に関するシュトラウスの見解については、村田玲「知恵と節度—レオ・シュトラウス『マキアヴェッリ論考』読解の諸前提に関する試論」（上）（下）、『政治哲学』第4号及び第5号、2006年及び2007年がすぐれた概観を示してくれている）。事実ファブリツィオ自身の言及においても（とりわけ『戦術論』第7巻）、古代ペルシアのキュロス大王やマケドニアのフィリポス2世など、時に極悪非道ともいえる手段をもって絶対権を握り（『デイスコルス』I-26）、戦争に勝利するのみならず軍隊そのものを改革する「二重の栄光に輝く」（『君主論』24章）存在の投げかける影が、次第に色濃くなっていることが察知できる（Lynch, op. cit., p. XV. Mansfield, op. cit., pp. 216-217）。

<sup>32</sup> Lynch, op. cit., pp. XIX~XX.

<sup>33</sup> J. G. A. Pocock, *The Machiavelian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton, 1975, pp. vii~viii, pp. 183-218. このような軍と社会の相補性は『戦術論』（序論）において「よき諸制度でも軍事力の助けがなければ崩壊するばかりです。それは、宝石や黄金を鑲めた豪華絢爛たる宮殿の住人たちが、屋根がないばかりに、いざというとき雨を覆ぐ手立てを持ち合わせないのと同じです」とたとえられる。

<sup>34</sup> スキナー／ヴィロリ。つまりヴィロリにとっては、『戦術論』こそがマキアヴェッリ政治思想の、「共通善や法の支配、そして市民的平等に奉仕する人間についての慣習的イメージ」と接合された共和主義的マキアヴェッリ像への従属を示す証左とされる（M. Villori, "Machiavelli and the Republican Idea of Politics", G. Bock, Q. Skinner, M. Villori ed., *Machiavelli and Republicanism*, 1991, Cambridge, pp. 168-169）。

い<sup>35</sup>。この観点から評価すれば『ディスコルスィ』や『戦術論』における市民的人文主義流の言辞の頻出など、「オリチェッラーリの園」の思想的部外者（くり返すが彼はベルナルド・ルチェッライの政敵ソデリーニの腹心だったのだ！）たる彼が、貴族共和的政治観を抱く「園」の公達を迎え入れられ、更には彼らを介しレオ10世をはじめとするメディチ家の人々との和解のため仕込まれた、修辭的「釣り餌」でしかない<sup>36</sup>。

従来『戦術論』解釈において主人公ファブリツィオ・コロナは、その発言の全体を通じ「マキアヴェッリの分身」と理解されてきた。対話体を取りながら事実発言の大半が、「導師」ファブリツィオの一方的発言によって占められている<sup>37</sup>。「園」の同人たちが各章で簡潔な問いを発する他、専らファブリツィオの高説を謹聴するという本書の構造は<sup>38</sup>、かかる分身説を受け入れ易くするものであった。スペイン王フェルディナント5世の傭兵隊長つまりは「仕える者」という立場に立つファブリツィオは、スキピオに代表される古代ローマ共和国に仕える武将たちに自身を比定し、軍事生活を通じ涵養される彼らの公民的美徳を称揚しているかの如く観じられる<sup>39</sup>。しかし「あなたはその行動において古代人を真似ない人々を論難し、他方あなたの職業である戦争においては、それこそあなたは傑物と目されているのに、なんら古代式の戦い方を活用していないように見受けられるのは、どういうわけでしょう」というコジモの質問（第1巻）は、軍に勤務する公民（「仕える者」）ではなく軍事をめぐる独自の新制度を作り上げる君主として<sup>40</sup>、必要とあらば非古代的手法へと踏み込むファブリツィオの「裏の顔」を暴き出している<sup>41</sup>。かくしてマンスフィールドによれば、「園」の同人達により提起される様々

<sup>35</sup> 石黒前掲論文『君主論』と16世紀初頭フィレンツェの党派政治』117～121頁。村田前掲65～72頁

<sup>36</sup> 「園」の公達の反メディチ陰謀に対するマキアヴェッリの責任を語るナルディの発言にもかかわらず、彼と「園」の関連を不問に処したジュリオ枢機卿（彼がロレンツォ2世によるマキアヴェッリの君主政樹立計画に、ある程度の理解を有していたことは石黒前掲論文「マキアヴェッリの政治観と諸階級の葛藤」37～40頁参照）の判断が、この時期のマキアヴェッリの著作の「市民的人文主義」的側面の修辭性を物語っている。

<sup>37</sup> こうした「導師」の一方的高説を、弟子が謹聴するという対話体の形式はプラトンよりむしろ、聖アウグスティヌスの『教師論』以来の、中世キリスト教的対話編の伝統につながるものである（近藤恒一『ペトラルカと対話体文学』創文社、1997年、4～17頁参照）。

<sup>38</sup> 1、2巻はコジモ・ルチェッライ、第3巻はレイージ・アラマンニ、第4、5巻はツァノーピ・ボンデルモンティ、第6、7巻ではバッティスタ・デッラ・パッラが質問役を担当している。

<sup>39</sup> ファブリツィオは第1巻において、「徳を讃えそれに報いること、貧乏を蔑まぬこと、軍事生活および軍事規律を敬うこと、市民たちが互いに愛し合うべく党派を作らず、私事よりも公事を優先させること」等々こそ、古代軍制の復活を通じ彼が意図することであると表明している。

<sup>40</sup> 『戦術論』第7巻においてマキアヴェッリはファブリツィオを通じ自身の意図を、「古代の軍隊がどうであったか、これをありのままに示すことではなく、この現代の軍隊よりも力量に勝る軍隊をいかにして組織立てることが可能か」を明らかにすることにしよう。

<sup>41</sup> 『戦術論』第1巻においてポンペイウス、カエサルらローマ共和国後期以降の将帥（專業的将帥）と、彼ら以前に活動した「勇猛かつ善良な」将帥（公民的将帥）とを区別することによ

の質問は、『戦術論』に展開される言説の解釈に多層的揺らめきを持ち込み、当世に復活したローマ公民ファブリツィオを「マキアヴェッリの分身」とする<sup>42</sup>、従来の『戦術論』解釈に再検討を迫ることとなる<sup>43</sup>。彼によれば本書におけるファブリツィオの言説とマキアヴェッリの思想を一体化させ、彼と「古典的伝統の究極の継続性」を見出したスキナーやヴィロリの観点こそ、オリチェッラーリの圖の若公達を瞞着しようとした、マキアヴェッリの修辞戦略に見事に引っかかってしまった一例である。それゆえリンチも言うように、本書におけるマキアヴェッリの真の戦略とは、「彼の第一の聴衆である人文主義的聴衆に、最もよく適合する言説より着手し、問題の精妙な取り扱いにおいてかかる言説を洗練させ、そして最後にその洞察と有用性において着目すべき新たな結論へと到達する<sup>44</sup>」ことに他ならなかったと言えるだろう。

### —III—

さて、『戦術論』においてマキアヴェッリの意図の多元的提起は、軍事問題の技術的解説をめぐっても貫徹されている。技術面に関しマキアヴェッリが一見、ヴェージェティウスの『兵学提要』やフロンティウスの『戦略論』、なかならず前者に追従していることは周知の事実である<sup>45</sup>。

『戦争論』は第一章で「徴兵」、第二章で「訓練と布陣」、第三章で「範例的合戦」、第四章で「合戦」についての一一般的事項、第五章で「行軍」、第六章で「野営」、第七章で「築城」をそれぞれ取り扱っているが、こうした配列すら実はヴェージェティウスの著作の踏襲に過ぎない<sup>46</sup>。ギルバートが指摘する通り本書が近代以降忘却されてしまった原因の一つには、その技術的提言のヴェージェティウスとの類似性が、本書の独創性自体を疑わせたことも挙げられよう。事実マ

---

りマキアヴェッリは、将帥が有するこうした表裏をなす二つの側面に言及している。

<sup>42</sup>彼は傭兵否定論者として「いざ戦争という際には祖国への愛にかけてはせ參じ、その後平和が戻れば喜んで家に帰る」（『戦術論』第1巻）民兵の視点を、表見的には自身の視点としている。かかる視点の延長上ファブリツィオは、「私は戦争を職業としたことなど決して」なく、主君フェルディナント5世の彼に対する信任は彼が、「平和時にも彼に対して助言できる」文官（公民）であることに存するとさえ主張し始めるに至る。

<sup>43</sup>『戦術論』におけるコジモら質問者たちの果たす機能についてはMansfield, op. cit., p.203, p.206. Lynch, op. cit., p.XXVなどを参照。

<sup>44</sup>リンチはこれに続けて「もし読者が当初の印象に幻惑されてしまうなら、その人は彼の読者に対するマキアヴェッリの阿諛追従を、彼自身の熟慮した見解と取り違えかねない」とすら断言している（Lynch, op. cit., p.XXVIII）。こうした観点から『戦術論』の真のあて先を、彼にとって根底的軍事＝政治改革をフィレンツェで推進する主体としてのメディチ家に求める、セネージのような見解が導出されてくる（D. Fachard, "Implicazioni politiche nell' Arte della Guerra", Jean-Jacques Marchand (ed.): *Niccolò Machiavelli Politico storico letterato. Atti del Convegno di Losanna 27-30 settembre 1995*, Roma, 1996, p.157）。

<sup>45</sup>L.A.Burd, "Le fonti letteraire di Machiavelli nell'Arte della guerra", *Atti della R. Accademia dei Lincei, 5<sup>th</sup> ser, Cl. di scienze morali, storiche e filologiche* 4, 1897, pp. 187-261. Gilbert, "L' «Arte della Guerra»", pp.213-214.

<sup>46</sup>Gilbert, op. cit., p.214.

キアヴェッリは表面上古代ローマの戦法を至上のものとし、これに執着する発言をファブリツィオにさせている。だがその実本書の至る処において彼は、これを16世紀初頭の戦争の現実に合わせて適当な修正を忍び込ませている。例えば剣を主要兵器とする古代ローマの盾兵陣と、ドイツ(スイス)傭兵軍を範に16世紀流行した長槍陣とを比較し、ドイツ方式とローマ方式のいずれの武装法を選ぶかと問われた時ファブリツィオは、間髪をいれず「むろんローマ方式だ」と返答した。だがそれにもかかわらず続く個所でファブリツィオは、ドイツ式とローマ式を折衷した布陣を推奨している<sup>47</sup>。

この折衷型の布陣法に関し彼の発想源となったのは、同時期にドイツ(スイス)長槍陣を駆逐し急速に普及しつつあった、スペインの〈テルシオ〉陣形(長槍兵と盾兵ないしは火縄銃兵の複合陣)に彼が下した高い評価に他ならない<sup>48</sup>。かかる陣形の推奨から読み取り得る論点とはマキアヴェッリが騎兵の突進力に対し、猶も抱いた少なからぬ恐怖である。確かに彼は著作の至るところで騎兵に対し否定的判断を示している<sup>49</sup>、だが専ら騎兵に対抗すべき兵種たる長槍兵を、理想的陣形の構成中に依然として維持せざるを得なかったことは、表見上の否定的評価に反して彼が内心、騎兵の威力に対する恐怖感を克服し得てはいなかったことを推測させて余りある<sup>50</sup>。騎兵に対する評価はマキアヴェッリの無意識において、決して単純なものではなかった。そのことは、戦争に関する自身の議論があくまでもヨーロッパの地理風土(それこそがローマ軍制の優越を保障する)という限定を前提にしたものであり、「アジアで普通行われていることの理由を説明する義務はない」という、コジモの追求に対するファブリツィオ(マキアヴェッリの表面的意識)の開き直りのような返答からも窺える<sup>51</sup>。その開き直りにもかかわらず

47 『戦術論』第2巻(「私は、ローマ人の武装とドイツ人の武装を取り入れようと思う」)。

48 1512年のラヴェンナの戦いにおいてスペイン〈テルシオ〉陣が、スイス傭兵軍の長槍陣を圧倒したことについては、『戦術論』第2巻に加えて『君主論』第26章に言及がある。

49 騎兵に対する否定的評価は、『戦術論』第2巻(「優秀な歩兵ならば、ただ騎兵に抵抗できるばかりでなく…」、「現代、幾度となく騎兵隊は歩兵隊に恥をかかされてきた」、「歩兵は騎兵に対して極めて確実性があり、それどころか騎兵によっては征服されえないものだ」、「騎兵は歩兵の威力に比べてはるかに劣る」)や、『ディスコルスイ』II-18などを参照せよ。こうした発言の背後に1471年ナンシーの戦いに生じた、ブルゴーニュのシャルル突進侯の騎士軍団の壊滅が、軍事学の世界に与えた衝撃が存することは無論であるが、マキアヴェッリの傭兵嫌いの感情が傭兵の象徴としての騎兵を忌避せしめたことも考えられる。

50 「騎兵を備えることも十分に重要である。もっとも、軍隊の中では第一ではなく第二の抛り所として」(『戦術論』第2巻)。文言上あくまで騎兵を軽視しようとする彼の表見的姿勢に、古代ローマ軍制を至上の軍制として主張しようとする、彼の硬直した思考が浮かび上がる。他方引用文が示すように、たとえ騎兵を評価することがあるとしてもそれは、騎兵の絶対的優位を主張するものではなく、騎兵と歩兵をその特性に応じ相関的に駆使すべきであることを主張するに過ぎない(マクニールも語るように「さまざまな兵種、さまざまな隊形を組み合わせた」戦術を開発することこそ、16世紀ヨーロッパ軍事学の課題に他ならなかった[マクニール前掲書30頁])。

51 先にも論じたように、こうしたコジモら対話者による質問を通じファブリツィオは、ローマ軍制の絶対性という自身本来の理念を破綻させられてしまう。かかる破綻を介してこそ、ファブリツィオという修辭的遮蔽物に隠匿されている、マキアヴェッリ議論の真意が次第に暴露さ

らずマキアヴェッリの直観は、「戦場が狭い場合にはローマ軍[歩兵]は優勢だが、戦線が広大だと戦利はバルティア人[騎兵]のものになる」<sup>52</sup>ことの認識を逸してはいない。換言すればファブリツィオ（マキアヴェッリの表面的意識）の絶対的基準である古代ローマすら、マキアヴェッリの無意識においては或る特定の時空に条件づけられた相対的事例と言うに止まる。マキアヴェッリの無意識にとり真の普遍知とは、かかる特殊知の集積を通じ瞬間的に到達される認識と言う他はない<sup>53</sup>。

〈テルシオ〉陣形へのマキアヴェッリの着目につきいま一つ言及すべき論点は、長槍兵と連動する兵種を彼が盾兵に限定するのに対し、現実の〈テルシオ〉陣形においては盾兵が火繩銃兵に、次第に取って代わられつつあったという事実であろう。G・バーカーによれば〈テルシオ〉陣形において盾兵は、1515年ごろまでにはほとんどその存在を消滅させてしまった<sup>54</sup>。〈テルシオ〉陣形における盾兵の活躍を彼が特筆大書するラヴェンナの戦いであっても、勝負を実際に決めたのは火繩銃隊の斉射の威力であった<sup>55</sup>。ドイツ（スイス）長槍隊没落の要因は、彼らの作る密集陣形が火繩銃斉射の格好の標的となり、死傷者が続出した点に求められる。にもかかわらずマキアヴェッリは火繩銃隊を野戦の主決戦兵力とは見なさず、これを助勢の効果が期待されるに過ぎない軽装歩兵部隊に配備するに止めている。そもそも彼の言によれば火繩銃隊の主要効果は、その轟音によって敵の「度肝を抜く」ことに限定される<sup>56</sup>。だがマキアヴェッリはこの新兵器の出現の意味に、鈍感だった訳ではない。既に『フィレンツェ軍制改革論』（1505）において彼は、歩兵100人につき10人の割合で火繩銃兵を配備すべきことや、火繩銃兵だけで編成される3、4個大隊の創設を進言することによって、この兵器に対し抱く関心の高さを示している<sup>57</sup>。また『戦術論』においても歩兵の主要兵種の一つとして火繩銃兵をあげ、彼らの在郷訓練に際し従来の石弓や弓に加え火繩銃の操作訓練を是非加えることや、軽騎兵隊への火繩銃の配備を積極的に主張している<sup>58</sup>。当時の火繩銃がその命中精度の低さや装填時間の長さにつき、様々の欠点を有する兵器であったことは否定できない。だが自身の着目する〈テルシオ〉陣形そのものが、斉射による命中精度の向上や長槍兵による支援により、火繩銃隊のこうした欠点に対する対策を提起していたにもかかわらず、マキアヴェッリはそれを無視してしまっている。かかる事態が出来る背景に我々は、マキアヴェッリの内面において展開する、公民ファブリリツィオ（表層のマキアヴェッリ）＝教条的古典主義者と君主ファブリツィオ（対

れていくこととなる。

<sup>52</sup> 『戦術論』第2巻。

<sup>53</sup> このようなマキアヴェッリ的知のありようは、軍事的力量としては『君主論』第14章（「だから、ある地域の地形に通じていれば、おのずから他国のことは知れるものである」）において、より知の一般的ありようとしては『ディスコルスィ』1-序（事例の集積を通じて一般的認識に達する医師や裁判官）に論じられている。

<sup>54</sup> バーカー前掲書27頁。

<sup>55</sup> ホール（市場泰男訳）『火器の誕生とヨーロッパの戦争』平凡社、2005年、261～271頁。

<sup>56</sup> 『戦術論』第2巻。実際の殺傷効果にあまり期待が寄せられないのは、マキアヴェッリが火繩銃兵の集団的活用に関心を抱いていないことをその一因とする。

<sup>57</sup> A.H.Gilbert, "Machiavelli on the Fire Weapons", *Italica* 23, 1946, pp.1-2.

<sup>58</sup> 『戦術論』第2巻

話者の質問を通じ弁証法的に露呈する深層のマキアヴェッリ) = 近世新軍制の幻視者との葛藤を見逃すことはできない。

これまで『戦術論』に対する批評としてマキアヴェッリがその教条的古典主義故に、1) 古代ローマの文物に対する無批判的な偏好、2) 軍事的専門主義の出現に対する躊躇、3) 技術革新全般の有害性の確信という固定観念の囚人となっていたことが指摘されてきた<sup>59</sup>。だがここで我々は、「有能さは静穏を生ぜしめ、静穏は安逸を、安逸は無秩序を、無秩序は滅亡を生じる」、という、彼の『フィレンツェ史』第五巻第一章の文言に目を向けてみたい<sup>60</sup>。それは軍事論として読み替えれば古代ローマがそうであったように、素朴な力量に基づく国勢の隆盛を契機に新たな軍事技術が導入され、そこから当該国に覇権がもたらされるものの、覇権獲得までの帰結としての平和故に力量に腐敗が生じ、腐敗が破滅へと帰着する一連の過程を指し示す。確かに、こうした腐敗により由来する破滅を回避するため「不毛の地」に都市を建設し、常に「勤勉に働かざるを得ず、怠惰に身を任せること」のないようにすることは一策ではあろう(『ディスコルスィ』I-1)。これは『戦術論』の文脈における、騎兵や火縄銃、ないしは後述するような大砲や要塞といった兵士の力量を代替し、それゆえ兵士の力量を衰弱せしめる技術的進化の一切を拒絶するという立場に照応する<sup>61</sup>。だがマキアヴェッリの真意はここにおいて、そのような精神主義に組しようとする点にはない。彼はむしろ「国を強大にし、攻撃を仕掛けてくる敵を跳ね返え」そうと考えるなら、「はるかに豊かな場所に根を下ろすことが必要」だと主張する。もっとも彼によれば、こうした土地の「温和な土地柄のため助長される怠惰な風潮」に対しては法、さらには訓練によってこれを矯正することが不可欠である。彼によればこのような法や訓練を通じ、厳しい風土出身の軍隊より「ずっと優れた兵士が成長した」のであった<sup>62</sup>。これを再び『戦術論』の文脈において読み替えるなら、軍事技術と兵士の力量を結合し、両者を並存せしめる法制度と訓練法の確立することこそマキアヴェッリの軍事論の要諦となる<sup>63</sup>。

<sup>59</sup> Lynch, op. cit., p. XXVII.

<sup>60</sup> あるいは同じ箇所における「訓練されたよき軍隊から勝利が生じ、勝利から静穏が生ずると、この武器を取っては勇敢な魂も文弱に流れて腐敗する」という文言にも留意のこと。

<sup>61</sup> こうした観点を象徴するのがマキアヴェッリも引用する、アテナイの城壁に対するスパルタ人の「女子供の住まいする都市であるならば素晴らしい」という、スパルタ人による評価である(プルタルコス『モラリア』)。こうした評価の起源はプラトンの『法律』求められるが、プラトンへのアリストテレスによる反論をはじめとする古代における論争の展開と、ルネサンス期におけるその継承に関してはJ. R. Hale, "Fortify or not fortify? Machiavelli's contribution to a Renaissance debate", J. R. Hale, Renaissance War Studies, London, 1983, pp.102-103, pp.107-108 に詳しい。

<sup>62</sup> 「飢えとか貧困が人間を勤勉へと駆り立て、法律が人間を善良にする」(『ディスコルスィ』I-3) という文言も参照せよ。

<sup>63</sup> 「自分たちよりも優れた武装様式に出会うと、それ以上に進撃しないか、あるいは外国の方式を取り入れて自国のものを捨て去った」、ローマ軍の旺盛な新技術摂取欲こそが、その武装を「いかなる国の方式よりも卓越」したものへと進化させたという、『戦術論』第2巻の記述にも、マキアヴェッリが古代スパルタ人の如く力量の保存のため技術(利便)を断念することを、良しとはしない立場をとっていることが看取できる。このような立場は、第一巻においてファブリツィオ(公民ファブリツィオ)が主張した、スパルタ人を想起させる「厳しくも強靱な」古

かかる観点を念頭に『戦術論』における軍事技術の導入の問題を、16世紀軍事革命の華とも言える大砲と築城につき検討してみる。マキアヴェッリの意識を拘束する古代崇拜（なかんずくプラトン風の精神主義的傾向）にもかかわらず、彼の無意識はこの問題に関しても技術革新に鋭い嗅覚を働かせ続けている。野戦や守城における大砲の効果に対する懐疑の一方<sup>64</sup>、攻城に関して彼はその圧倒的效果につき評価を誤ることはない<sup>65</sup>。マキアヴェッリによるこの高い評価の背景には、1494年イタリアに侵攻したシャルル8世のフランス砲兵隊が招来した衝撃がある<sup>66</sup>。マクニールによればそれ以前7年間の攻城戦を持ちこたえたナポリ王国の要塞が、フランス軍砲兵の威力の前にわずか8時間で陥落したという<sup>67</sup>。フランス軍砲兵の示したこの威力こそ、中世末期の傭兵戦争特有の「消耗戦略」を無効化する要因となる。換言すればこのことがマキアヴェッリをして、「広々とした戦場であらゆる敵と渡り合うこと、そして決戦に勝利すること」（『戦術論』第1巻）を戦争の主目的に掲げる、「殲滅戦略」の主唱者たらしめたのだ<sup>68</sup>。

しかしながら16世紀初頭軍事技術の日進月歩の変化は、マキアヴェッリが提唱した「殲滅戦略」を忽ち時代遅れのものにしてしまった。早くも1515年頃その名も「イタリア式築城術」と称される、攻城砲に対抗し得る築城術が出現した<sup>69</sup>。このことが『ディスコルス』II-24で

---

代人の模倣に対する、コジモの「それほど奇抜でない程度に可能な範囲で古代風を模倣」すべきという、より温和な古代模倣観に繋がるものである（このような立場こそが）。さらに言えばこうしたより柔軟な模倣観を踏まえることによって、単なる古代ローマ軍の復元ではなく「当世の軍隊よりも力量に勝る軍隊をいかにして組織立てることが可能か、これを明らかにすること」（第7巻）という、『戦術論』の主題が引き出されることとなる。

<sup>64</sup> 野戦における大砲の弱点としては装填時間かかり、また敵軍からの攻撃に対しそれ自体では防御手段を有さぬことに加え、射角調節の難しさから命中率が著しく低かったことが挙げられる（『ディスコルス』II-17及び『戦術論』第3巻参照）。

<sup>65</sup> 「大砲はどんな頑強な城壁でも問題にしないくらい強大で、わずか数日には破砕してしまふ」（『ディスコルス』II-17）。野戦においても砲撃が正確に対象を捉えた場合、「砲撃による被害たるや、甚大極まりないもの」だと彼も認めている（『戦術論』第4巻）。

<sup>66</sup> このときの軍事環境の激変をグイッチャルディーニはその『イタリア史』において、「支配権力のみならず、統治と戦争の術にもまた転変をもたらしながら、仏軍の進入の結果はさながら野火や疫病の如くイタリア全土に広がった…今や戦争は迅速かつ凄惨なものとし、王国は従前の村落以上のすばやさで荒廃せしめられ、征服されるに至った。都市の攻囲もまた短時間のものとなり、幾月も要したのに相変わって何日間か、更に言えば何時間かのうちに決着がつくこととなった」と精彩溢れる筆致で記している（F. Guicciardini, *Storia d'Italia*, vol.I. Cap.6）

<sup>67</sup> 「フランス人は、砲を町の城壁の下に隙間なくびっしりと、あっという間に据えつけ、砲弾は矢のように飛来し激突する。かつてのイタリアならば三日かかったことが、今では三時間でできるほどであった」（パーカー前掲書 18頁より引用）

<sup>68</sup> またそれより少し後においても彼は、「ある人が決戦に勝てば、これでその人の誤った行いはことごとく帳消しとなるように、同じく決戦に敗れば、前もってその人が首尾良く取り組んだことは全て無駄となってしまう」（『戦術論』第1巻）と、その主力決戦による「殲滅戦略」を表明している。スイス傭兵隊長槍兵の密集陣形やスペインの（テルシオ）陣の名声は、実にこの「殲滅戦略」の復活に由来するものである。

<sup>69</sup> その最初の完成例が教皇領チタヴェッキアに建造された要塞である（パーカー前掲書 18頁）。

「本国を守っていくにあたっては、城塞は有害であり、一方、征服した地方を維持していく場合でも、城塞は無用のものである」とした、マキアヴェッリの観点を一転させる。『戦術論』においてマキアヴェッリは要塞が無用なものである旨の判断を、一度たりとも下すことはない。逆に堅固な要塞の範例を示すことに、その第7巻の主題が捧げられている程だ。しかしその一方、第7巻に彼が示した堅固な要塞の範型は当時の技術水準から言って、稚戯に等しい代物でしかない<sup>70</sup>。そこに言及される内堀内の低くまたゆるく固められた土盛りは確かに、「イタリア式築城術」の初歩形態を示唆してはいる<sup>71</sup>。しかし既にこの頃イタリア各国において、稜堡と外堡の巧みな組み合わせにより構成された相互十字砲火システムを備えた、より完成された設計思想による要塞が一般化しつつあった。にもかかわらずマキアヴェッリの要塞構想には、新しい築城術の焦点である稜堡や外堡への関心がほとんど見られない。それどころか第7巻において彼は、外堡の有効性に対して徹頭徹尾否定的見解を語っている<sup>72</sup>。

この後 1526 年マキアヴェッリはフィレンツェ要塞整備委員長として官職に復帰し、ピエトロ・ナヴァラの如き専門家との出会いを通じて知識の現代化に努力した。その成果を示す作品が『検視報告書』に他ならない。そこにおいて彼は、稜堡や外堡による十字砲火システムへのそれなりの理解に到達するに至っている<sup>73</sup>。城壁をめぐるマキアヴェッリの視点のこうした変動から窺えるように、攻撃兵器と防御システム間の技術開発競争が熾烈に展開した 16 世紀初頭のイタリアにおいて、これら相互の優劣につき暫定的評価以上のものを下し得ないことは、彼自身これをよく自覚する処であったに相違ない<sup>74</sup>。笹倉秀夫の主張によればマキアヴェッリの政治論は、クセノフォン、ヴェージェティウスやフロンティウスの如き古代の軍事論の読破により形成された、その軍事論の政治面への転用にその特徴がある<sup>75</sup>。かかる政治＝軍事論の主要な立脚点は、「正確な認識と合理的で柔軟な判断、動的・機能的・多元的なものの見方」に

---

頁)。「イタリア式築城」にかんしてはマクニール前掲書 123 頁も参照。

<sup>70</sup> 第7巻の範型の眼目は、薄く高い城壁を内堀の外側に設置することにある。これは専門家からしばしば空想的と酷評される提案であるが、マキアヴェッリの意図はむしろ、既存の中世的城壁の当世如何に活用するかという折衷的視点であった。

<sup>71</sup> Di Fusco, "Le fortezze secondo Niccolò Machiavelli", *Ricerche storiche*, vol.20, 1990, p.30.

<sup>72</sup> こうした時代錯誤の一因としては当時彼が官職を離れ、最新の軍事情報に直接触れ得る立場を失っていたことが考えられよう。

<sup>73</sup> この『検視報告書』において彼は稜堡の要塞防衛上の機能につき、より積極的な評価を下すようになっている(マキアヴェッリによるかかる評価の転換については、A. H. Gilbert, *op.cit.*, p.281 及び Di Fusco, *op.cit.*, pp.33-34 を見よ)。

<sup>74</sup> 「こうした対策について一定の判断を下すことは、それぞれの君主が決断を下すに至った各国の特殊事情を見ていかななくては不可能であろう」(『君主論』第20章)。またローマ歩兵軍とバルティア騎兵軍の優劣に関して(歩兵の優位という彼の通常的確信にもかかわらず)「戦場の広さや狭さにしたがって、両者の勝敗はさまざまだった」ことを認めつつ、歩兵軍の優位という自身の結論をヨーロッパの気候風土という特殊条件を踏まえたものとして主張している。

<sup>75</sup> 笹倉によればこうした思想の起源においてマキアヴェッリの政治論は、プラトンをいしはアリストテレスに由来する人文主義的政治論に対して、顕著な独自性を示すという(笹倉秀夫「マキアヴェッリ再考」(1)(2)(3)『法学雑誌』第41-42巻、1994-95)。

他ならない<sup>76</sup>。16世紀初頭の軍事技術の革新に関して言えばマキアヴェッリは、騎兵や火繩銃、大砲や築城術といった刻一刻変化する条件と、「長年にわたる経験と古のことについての不断の読書」により育んだ「動態的・機能的・多元的なものの見方」との比較照合を通じて、戦場で用いられるこれらの手段相互の優劣につき、その時々での暫定的な判断を提示しているに過ぎない<sup>77</sup>。繰り返しとなるが『戦術論』における彼の企図は、「古代の軍隊がどうであったか、これを諸君にありのままに示すことではなく、この現代の軍隊よりも力量にまさる軍隊をいかにして組織立てることが可能か、これを明らかにすること」にあるのだ<sup>78</sup>。こうした彼の暫定的・流動的見解の提示のためにこそ、『戦術論』において対話体の採用が必要かつ不可欠のものでされたのである。

#### -IV-

多岐にわたりつつも相対的観点に貫かれた『戦術論』の論点の中で、続く時代の軍事革命にもっとも大きな影響を与えたものは、第二巻に詳述された軍の組織と訓練に関する考察である。マキアヴェッリはローマ軍団に倣って編成した歩兵 6000 名よりなる一個軍団を、「600 名の伍長、そして 15 人の大隊長と 15 名の鼓笛手と 15 名の旗手と 55 名の小隊長、正規軽歩兵の 10 名の長」及び「自らの鼓笛手を備えた軍団の司令官 1 人」を擁する、複雑に区分された組織として提示する<sup>79</sup>。とりわけ注目すべきはこの軍制の優越の根拠を、上記大小の分隊組織が訓練の徹底の成果として、集合及び離散の運動を熟知する処に求める点であろう<sup>80</sup>。マキアヴェッリが『戦術論』で主張したこのような軍隊観を開花させたのが、オランダの名将ナッサウ伯マウリッツであった<sup>81</sup>。ローマ軍の戦闘行動の研究から彼は「一切の曖昧を廃した単一の指揮系統が、一戦闘の全体に責任を持つ将軍から、一小隊の各横列に責任を持つ下士官まで徹底し…階級序列のどのレベルにいる指揮官も、上から降りてくる命令に対応し…しかるべき下位の司令官に伝達する」システムを作り上げた<sup>82</sup>。ここに言及されるシステムが「前もって印をつけておいた樽板をばらばらにしても、いとも簡単にそれを元に戻すことができる」ように、幟旗や軍装に付された名列番号を手がかりに、「瞬く間に本来の位置につくことができる」マキアヴェッリの部隊編成システムの嫡子であることは言うまでもない<sup>83</sup>。もっともマウリッツの軍隊

<sup>76</sup> 笹倉「マキアヴェッリ再考(3)」、34頁。

<sup>77</sup> 攻撃技術と防御技術の間の弁証法的葛藤については、Hale, op. cit., pp.103-104, p.113.

<sup>78</sup> 『戦術論』第7巻。

<sup>79</sup> 『戦術論』第2巻。彼によればこれと同様の規模や組織を持つ軍隊をローマ人はレギオン、ギリシア人はファランクス、ガリア人はカテルヴァと称したという。

<sup>80</sup> 「彼らは隊列の中で、体制を維持し、合図やラッパや、体調からの号令に従うことを身につけねば」ならず、また「停止、後退、前進、戦闘、行軍、それぞれ規律を守らねば」ならないとする(『戦術論』第2巻)。

<sup>81</sup> 訓練に重視と並んでマウリッツは野戦築城の重視をもローマ軍から学んでいたが、これもまた『戦術論』第6巻に詳論される主題である。

<sup>82</sup> マクニール前掲書 175~177頁。

<sup>83</sup> マキアヴェッリの読者としてのマウリッツについては Lynch, op. cit., pp. XXV-VVVI 及び Gilbert, op. cit., pp. 216-218 参照。

とマキアヴェッリの軍隊の間には、決定的な差異がある。即ち、マキアヴェッリの軍隊が「自発と強制が混ぜ合わされた」徴兵制度により編成される臣民軍であるのに対し、マウリッツの軍隊が純然たる傭兵軍である点に他ならない<sup>84</sup>。ここにマキアヴェッリの軍事観と16世紀以後の軍事革命の距離を測る上での試金石がある。

マキアヴェッリの傭兵批判にもかかわらず、15世紀末葉イタリアの傭兵制は必ずしも効率性を欠く制度ではなかった<sup>85</sup>。傭兵将軍たちは確かに決戦による敵の殲滅に関心を抱かず、専ら詰め将棋のような駆け引きに終始した。しかしそれは当時の軍需物資の補給能力の脆弱さや城塞の耐久性により、当時の戦争が「消耗戦略」を前提に遂行されたことによるものであり、傭兵将軍たちの食欲や怠惰に責を帰するには当たらない<sup>86</sup>。また傭兵市場が次第に買い手市場となっていく傾向のもと傭兵将軍たちは、自身の名声の維持や契約の継続のため、職務に対する忠実さを喧伝する圧力にさらされていた<sup>87</sup>。加えて軍団規模の大型化や火器導入による軍備の高価格化の潮流を前提に、特定の雇い主との安定した契約関係の構築により宿营地や軍需物資を継続的に確保することの方が、不実な行為による下克上より結局高いリターンをもたらすことが、軍事ビジネスの業界において広く認識されるようになった<sup>88</sup>。他方雇い主たる国家の側も多くの場合、戦争の突発に備えまた傭兵将軍への統制を強化するため、傭兵契約の長期化を志向する傾向にあった<sup>89</sup>。この契約の長期化の延長上に、徴兵の常備軍ではなくむしろ傭兵の常備軍が出現したのである<sup>90</sup>。こうした状況の典型はミラノ公国の事例に他ならない<sup>91</sup>。最も成功した傭兵将軍フランチェスコ・スフォルツァによる公国獲得が皮肉にも、「多くの傭兵隊を、それまでの移動的、『よそ者』的な傾向から土着的、定住的軍隊として土地に結びつける」契機となった<sup>92</sup>。

ミラノ公国は単に傭兵契約を長期化させたのみではない。公国はその中央集権権力の強化に

84 『戦術論』第1巻。

85 こうした傭兵の有用性とマキアヴェッリの所説の対比については Gilbert, op.cit., pp.213, Lynch, op. cit., p.XXX を参照。またより一般的な議論についてはマクニール前掲書 100~108 頁、永井三明「15世紀イタリア社会と傭兵制度の展開」、京都大学文学部西洋史研究室編『傭兵制度の歴史的研究』比叡書房、1955年、特にその279~297頁、M・マレット（甚野尚志訳）『傭兵隊長』、E・ガレン編（近藤恒一、高階秀爾編訳）『ルネサンス人』岩波書店、85~98頁などを見よ。

86 当時のイタリア諸国家の軍事戦略については永井前掲論文 293~297頁、マクニール前掲書 100~108頁、マレット前掲論文 94~96頁などを見よ。

87 マレット前掲論文 81頁、バレストラッチ前掲書 94~96頁。

88 マレット前掲論文 78頁、83~85頁、バレストラッチ前掲書 97頁。特にミラノ公国の事例を中心とした永井前掲論文 280~284頁の議論が参考となる。

89 バレストラッチ前掲書 94~98頁。

90 前川貞次郎「序論—傭兵制度の歴史的類型」、京都大学文学部西洋史学研究室前掲書 7~9頁。

91 ミラノに限らず「14世紀終わりまでにイタリアの諸国家が強大化し、確固として安定した構造を獲得していった」ことより、これらの「国家が、傭兵隊長を統制し規律に服させるメカニズムを発展させていったのである」（マレット前掲論文 86頁）。

92 永井前掲論文 281頁。

より給金や軍需品を傭兵軍団に安定的に供給した一方、かかる支給品が隊内で効率的に運用されているか否かを監視する、「軍監」を派遣する体制をも整えて行った<sup>93</sup>。また有力な傭兵隊長にはミラノ領内に封土が与えられ、それにより傭兵将軍は自身の軍を維持する基盤を獲得する反面、国家が傭兵将軍をいっそう緊縛することが可能となった<sup>94</sup>。かくの如き（新しい封建制）を通じミラノを筆頭に各国は、傭兵を自国内において徴募することが可能となったのである<sup>95</sup>。イタリア各国における傭兵軍の常備軍化の傾向に取り残されていたのが、フィレンツェであった。この国では僭主による政権篡奪の手段として、軍隊の常備化自体が伝統的に忌避されていた<sup>96</sup>。またこの国を支配する富豪市民の近視眼的経済合理主義が、軍事費の恒常的支出を受け入れなかった点も見逃せない。またその政体の不安定な構造が財政基盤の確立の障害となり、その結果傭兵給与の遅配が頻発する。それは同国の傭兵統制力の脆弱さの最大の原因ともなった<sup>97</sup>。更に言えばフィレンツェ共和国がその共和制理念の故に、傭兵将軍の統制手段としての所領の授封という手段を断たれていたことも、同国における傭兵の常備軍化を困難とする一因であった<sup>98</sup>。

つまり『君主論』第12章に特筆大書された反覆常ならざる傭兵というイメージは、当時の傭兵一般の状況から引き出された傭兵像ではなく、マキアヴェッリがそれに規定されたフィレンツェの傭兵という、特殊条件から引き出された傭兵観に過ぎない<sup>99</sup>。ところで各国が先に論じ

<sup>93</sup> ミラノと並んでこうした制度が整備されたのがヴェネツィア共和国である。永井三前掲書 283～286頁。

<sup>94</sup> 傭兵将軍ピッチチーノは、既に当時のミラノ公家ヴィスコンティ家よりアベニン渓谷地帯 100カ村を授封されている。またヤコボ・ダル・ヴェルメはヴェネツィア貴族として登録される榮に浴している（永井前掲書 281頁及びバレストラッチ前掲書 52頁。マレット前掲論文 88頁も参照）。

<sup>95</sup> 常備軍化したミラノ傭兵軍団のこのような状況を永井三前は、「結論としてミラノ常備軍は、家臣団の兵員と、近隣の小君主よりなり、他は臨時に召集される「地方人の選抜兵」(cernite) pesante によっていて、いわゆる外人傭兵に全く依存しない」軍隊であったと評している（永井前掲論文 283頁）。

<sup>96</sup> ソデリーニ治下における臣民徴兵軍創設計画に際してマキアヴェッリが腐心したのもまた、支配階級のかかる忌避感情の緩和であった（『フィレンツェ国を武装化することについての提言』（筑摩版『マキアヴェッリ全集』第6巻）42頁）。『戦術論』第1巻においても外人傭兵（「外国軍を利用するところは、すぐにも雇った当の傭兵隊長と有力市民に恐怖を抱くのだ」）ばかりでなく、常備軍一般に対しフィレンツェ人が抱いた懸念（「私的な職業として戦争をする者どもからなる歩兵の一団以上に危険極まりないものはない」）が言及されている。

<sup>97</sup> 「国家が傭兵に対し長期的に十分な額の報酬を与え始めた」ことの重要性については、マレット「傭兵隊長」86頁を見よ。

<sup>98</sup> 永井前掲論文 287頁。また永井によれば、フィレンツェが傭兵隊の主産地とも言うべきローマニヤや教会国家に近接し、彼らを比較的容易に召集し得たことも、この国における常備軍未発達の一因となった。またマレット前掲論文 103頁も参照。

<sup>99</sup> 他のイタリア諸国における傭兵等政策の成熟の結果、当時の傭兵将軍とは一国一城の主を狙う風雲児というよりはむしろ、「せいぜい所領または封土の拡大や安定した収入の獲得」により「一定の尊敬と社会的地位の獲得」を願う軍事官僚と化していた（マレット前掲論文 75～76

た如き種々の手段を通じ、統制強化による傭兵の常備軍化に努力した背景には、先に論じた16世紀後半のマウリッツの軍事操典に頂点を見る、歩兵の集団戦闘術が考えられる。兵士相互の連係動作習熟の重要性はなにかんずく、〈テルシオ〉陣以降の火縄銃中心の歩兵陣における、装填時間の長さを補う連射システムに関し特に重視される点であった。各レベルのユニットが半自動的に連係動作を行うことにより、一軍全体があたかも「単一の中樞神経を備えた生物体」となる状態に達するには、絶え間ない訓練の繰り返しが不可欠だ。だがかかる連日の猛訓練の持続が、マキアヴェッリが前提とする民兵的徴兵軍に果たして可能であろうか。確かに彼は近世軍事史において訓練の重要性を強調した、嚆矢とも言うべき人物である<sup>100</sup>。その一方彼はその「フィレンツェ国を武装することについての提言」に、兵士たちが自身の経済生活を営む都合上、「年12回ないしは16回以上の「演習」を課さない」と言明している<sup>101</sup>。たかだかこの程度の演習で、彼が主張する変幻自在の布陣動作を行えようはずがない。少なくとも表層意識次元のファブリツィオ（即ち公民ファブリツィオ）は、古代ローマの先例を模倣しようとする余り、現実を明らかに見失ってしまっている。マキアヴェッリの念頭には共同体に基礎を置く、スイス民兵長槍軍というお気に入りの実例があったのかも知れない<sup>102</sup>。しかしマクニールが指摘するように、そもそも「14世紀にイタリア都市国家が傭兵軍団に頼ることを余儀なくされたのは、スイス民兵軍を支えるような「軍事行動の基盤となりうるような第一次集团的コミュニティが崩壊」していたためなのだ<sup>103</sup>。

-V-

『戦術論』第1巻冒頭における民兵軍讃美の根底には、序論にも語られた「市民生活と軍事生活の一致」を踏まえた、市民的人文主義の理念がある<sup>104</sup>。軍事的献身を介した国家への参加において、各自は公民たる自己を実現することが可能となる。だがマキアヴェッリが範にとる古

---

頁及び82頁)。「私は、戦争を職業としたことなど決してない… [フェルディナント王は] むしろ私が平和時にも彼に助言できることに重きを置いてくれる」(『戦略論』第1巻) というファブリツィオの発言もまた、こうした傭兵將軍の官僚化を前提としたものであろう。

<sup>100</sup> 「優秀な軍隊というのとは、兵士を強く、機敏に、しかも抜け目なくさせるだけでは十分ではないことだ。それというのも、さらに彼らは隊列の中で、体制を維持し、合図やラッパや、隊長からの号令に従うことを身につけねばならない。また停止、後退、前進、戦闘、行軍、それぞれの規律を守らねばならぬ。そのわけは、こうした規律がなければ、どのように性格で入念な計画が遂行されても、決して優れた軍隊とはならない」(『戦術論』第2巻)

<sup>101</sup> 「武装化することについての提言」40頁。

<sup>102</sup> マキアヴェッリの理解によればスイスやそれと同様にドイツ(マーニャ)においては、かかる「第一次的社会集団」が維持され、それが国民皆兵制度をはじめとする健全な社会体制の基盤をなしている(『ディスコルスィ』I-55)。

<sup>103</sup> マクニール前掲書92~93頁、179頁。

<sup>104</sup> 『戦術論』第1巻においてマキアヴェッリは「いざ戦争という際には祖国への愛にかけてはせ参じて、その後平和が戻れば喜んで家に帰る」古代ローマ公民の美德を讀んでいる。

代ローマ共和国自身、かかる理想をどこまで貫徹しえたか。マキアヴェッリ自身の深層意識を探る一つの手がかりとして、『ディスコルスィ』I-51を注視したい。そこにおいてマキアヴェッリはローマ共和国が戦役の長期化に対応するため、その兵士に給与を支払うことに決したことを伝えている<sup>105</sup>。この記述が「こうやって [給与によって] 兵士らを養うやり方は腐敗した良くない方法なのだ」(『戦術論』第1巻)とする、彼の論調を裏切るものであることは明らかであろう。かかる傾向の帰結として後の皇帝たちは親衛隊という一大傭兵常備軍を備え、兵士が「軍隊生活を自分の生業とする」ことを認めるに至る<sup>106</sup>。確かにマキアヴェッリはローマの親衛隊の引き起こした数々の不服従や混乱を、傭兵制度のもたらす弊害の典型例として、口を極めて罵倒している<sup>107</sup>。だが、先に火器や城塞の導入の可否をめ

ぐるマキアヴェッリの判断について触れたように、国勢の拡大という究極の<sup>ネチェシダク</sup>〈必然〉に応じて統治者は、毒性を含む手段の採用にあえて踏み込まなければならない<sup>108</sup>。1494年のフランス軍南下以降の20年間(公人マキアヴェッリの活動期に重なる)は、防御(要塞)に対し攻撃(火器)が優勢を示した時代である。その結果この時期に限ってのみ戦争が、主力決戦により短期に終結する可能性が開かれていた。マキアヴェッリが古代ローマに倣った民兵主義を称揚し得た前提には、戦争の短期終結のこの可能性が存したと思われる。だがマキアヴェッリの晩年築城術が急速に改良され、軍事思想の常識は再び短期殲滅戦略から長期消耗戦略へと逆流し始めていた。

上述の如き状況を前にマキアヴェッリは、なおも民兵に基づく徴兵制を主張し得たであろうか。もし彼がそれに固執したとすればそれは、彼の意識の表層を拘束し続ける市民的人文主義好みの古代崇拜故に他ならない。民兵に基づく徴兵制という構想自体、16世紀初頭というある一定の時空を条件に下された相対的判断であり、技術や政治状況の変革が別の条件を付与すれば、それと相関して彼の意識の深層は別の判断を発動したに違いない。「戦いに打ち勝つには、二つの方法があることを知らなくてはならない。その一つは法律によるものであり、他は力によるものである。前者は人間本来のものであり、後者は野獣

<sup>105</sup> 『ディスコルスィ』I-51.この箇所では彼は続けてその原因を、「このままでは長期戦にたえうはずもなく、そのため、包囲戦に従軍したり、本国を遠く離れたところに出兵したりすることが不可能」であったことに求めている。

<sup>106</sup> 『戦術論』第1巻。

<sup>107</sup> 「ここから親衛隊兵士の傲慢が生まれ、連中は元老院にとっては恐ろしく、皇帝にとっては害悪をもたらすものとなった」(『戦術論』第1巻)。類似の批評は『君主論』第19章にも詳しい。

<sup>108</sup> このことを明らかに示すのが『ディスコルスィ』I-6において論じられる、スパルタ型とローマ型という共和国の二タイプの中の、ローマ型の選択という議論に他ならない(「ローマの内紛の元となるものを捨て去ろうとすれば、同時に大国になっていく伸張力をもなくしてしまうことになった」だろう)。このような毒性を含む手段(「健全な国家で使われているのとは全く違った制度や方法が、墮落した国家では必要となってくる」)を受け入れつつ、毒性の緩和のため「歴史の歩みに応じつつ、新しい法律を作り、新しい制度を打ち建て」ることこそ、指導者の任務に他ならない(『ディスコルスィ』I-18)。

のものである。だが多くの場合、最初のものだけでは不十分であって、後者の助けを求めなくてはならない。つまり、君主は野獣と人間とを巧みに使い分けることが必要である」—マキアヴェリズムの真骨頂を示す個所として名高い、『君主論』第 18 章の一節である。一定の時空という条件を踏まえ構成された一定の国制内へと組み込まれ、法制度の庇護の下に置かれる公民即ち人間ファブリツィオ（表層のマキアヴェッリ）は、自身が「公共善に奉仕するのは、公共善が彼らの各自の個人的利益に役立つからだ」ということを忘却した存在である<sup>109</sup>。一方かかる国制の外部に突出し、時空の条件の流動的状況に即応しつつ国制（根幹としての軍制）自体を創造する君主、即ち猛獣ファブリツィオ（深層のマキアヴェッリ）にとり、「共和主義に含意される公共善への熱烈なる献身の呼びかけ」は共感を誘うものではない。リンチの見解を引用すれば、何にも増して私心なき献身を要求する政治行為たる戦争においてすら「兵士（公民）はその指揮官（君主）による、自身の死の恐怖と物質的報償への希望の操作を介して動機付けられている」に過ぎない<sup>110</sup>。公民の政治行為は君主の観点からすれば、公共善への献身という観念により前者が忘却している、利己的・物質的衝動に突き動かされている。君主の観点より見たこうした現実在即せば、問題は傭兵が物欲に動かされることなのではない。君主にとり障害となるのは、個人としてまたは集団として彼らの欲望が、君主（指揮官）の張り巡らした統制の水路を越えて、無際限・無方向に氾濫することなのである<sup>111</sup>。先に概観した如く 16 世紀初頭イタリアの君主たちは、かかる統制の水路を十重二十重に張り巡らせはじめていた。

リンチによればシュトラウスの理解に従ったこのような解釈により、「暴君セプティミウス・セヴェルス帝の専門職軍隊やローマ共和国後期の給与兵」は邪悪なごろつき集団ではなく、「効率的か強く制御された軍事力のモデル」と再評価される。むしろ君主ファブリツィオ（深層のマキアヴェッリ）により真に忌避されるべきは、傭兵であるか徴兵であるかを問わず、「政治的権威（彼は同時に軍事的権威でもありうる）により給与を支払われ、統制される」ことのない、そのような兵士なのであった。実際、深層のマキアヴェッリの政治観にとり統制された傭兵は、政治上さして問題となるものでなかった。そのことは「ローマ時代は人民より兵士が権力を持っていたから、当然人民より兵士の歓心を買おうとした」が、今日では「兵士より民衆のほうが権力を持っているから、君主は兵士より民衆の気持ちを満たすことが必要である」という、『君主論』第 19 章の文言にも窺われる。これを管見によるマキアヴェッリ政治思想の到達点とも言うべき、『君主論』第 9 章に言及される（絶対的君主政）との連関のもとに考察すれば、「民衆の上に土台を置き」、「いつでも、またどのような時勢になろうと、市民に対して自分の政権がどうしても必要であると感じ取らせ」、市民の彼に対する忠誠を確保することに成功した支配者であれば、傭兵の脅威など恐れるに足りないとする判断を彼が下していたことを推測させる<sup>112</sup>。

<sup>109</sup> Lynch, op. cit., pp. XXII-XXIII（および村田前掲論文（下） pp. 68-71 参照）。

<sup>110</sup> 『戦術論』第 1 巻に語られる、公民の「強制だけでも自発だけでもない中間の道」による徴兵への服従という動機自体が、当事者のかかる心理構造を暴露している。

<sup>111</sup> Lynch, op. cit., pp. XXII-XXIV.

<sup>112</sup> これは換言すれば現代にまで及ぶ「文民統制」の問題である。

以上マキアヴェッリの『戦術論』を素材とし、市民的人文主義と君主の権力、技術と力量、火器と築城、傭兵と徴兵といった、そこにおいて対位的に展開される諸論題を検討してきた。こうした諸論題に関するマキアヴェッリの判断を貫いているのは、彼がヴェージェティウスやフロンティウスの如き古代の兵学者から学びとり、それを政治的分析に転用することにより自身の政治観を生み出した、「動態的・多元的・機能的なものの方見方」(笹倉秀夫)に他ならない。この書物は、読者のそれぞれの立ち位置—身分が公民であるか君主であるか、成長と衰退を反覆する政治—歴史環境のどこに位置しているのか、展開する技術条件の何を踏まえているのか等々—に応じ、さまざまな読み取りを許す軍事知の万華鏡として構成されている。対話体という文体はこの知の万華鏡を可能にする(たくらみ)として、意識的に選択されたものだ。なかならず重要な観点とは、この書物の中における公民の視点と君主の視点の錯綜に他ならない。本書の主要人物ファブリツィオ・コロナは一面では、アラゴン王フェルディナント5世に仕える傭兵将軍、それも意識においては戦場の将軍である以上に、平時の助言者即ち顧問官という公民であるに止まる。彼は君主フェルディナントが創出する法と制度の内に閉じ込められており、その庇護/監視の下(人間)として行為することを保障されている<sup>113</sup>。しかしその裏面で彼は彼自身、「軍隊を古代風の制度に移そうと自ら準備した」、隠れた君主でもある。彼のこの裏の顔は、議論が創設された臣民徴兵軍を如何に駆使するかという技術論的側面に入り込むや、ほとんど隠蔽されてしまう。そこにおける将帥(ファブリツィオはこうした将帥に自身を同一化している)は既成の国家から統帥権を委託され、その権限に基づいて徴兵の実務を行い、武装を施し訓練を行い、各部隊を配置し、戦闘を指揮し行軍を引率し、野営を張り攻城に携わる戦争技術者でしかない。このような存在として彼は、兵士を公共善への無私の献身へと導くとともに<sup>114</sup>、自身かかる献身を率先垂範することとなる<sup>115</sup>。

<sup>113</sup> 国体の創造者すなわち猛獣としてのフェルディナント5世の姿は、『君主論』第21章に活写される。

<sup>114</sup> こうした兵士の献身についてマキアヴェッリは「こうした善良な人たちは戦争を自分の生きる手立てとして利用しないで、労苦と危険、それと栄光以外には戦争から何も得ようとはしなかった」と讃えている(『戦術論』第1巻)。

<sup>115</sup> 『戦術論』第1巻にこうした献身の一例として、「自分の使用人が荒らしてしまった自家農場を世話するため、戦場での栄光を振り捨てて帰郷することを求めたレグルス・アッティリウスの逸話が語られている。また『ディスコルスィ』Ⅲ-22においては、ローマ共和国に献身する一武将として、個人の不評を省みることなく秋霜烈日、軍規を引き締めローマの軍事訓練の伝統を蘇生させたマンリウス・トルクアトウスの事例が紹介されている。こうした観点は「その祖国の中で一市民として生活している人は、スキピオよりカエサルの役割を演じたいと希望することなどあり得ない」という『ディスコルスィ』Ⅰ-10の発言において頂点に達する。彼のその人格の偉大さが人々に与えた畏怖の念ゆえ、共和国から数々の忘恩の仕打ちを蒙ったにもかかわらず(『ディスコルスィ』Ⅰ-29)それを平静に受け入れ一市民の分に止まり、「元老院の指図に従って生活した」(『君主論』第17章)のである、Ⅰ-10においてこのようなスキピオ像は、市民でありながら市民の範疇を超え国家の支配者になりあがったカエサルへの批判とついにして語られるが、「勇猛なものとしての名声」を得たカエサルを、「勇猛でかつ善良なものとして栄光を得た」スキピオと対比的に把握する点において、『戦術論』第1巻は『ディス

だが第六巻、第七巻と展開し、『戦術論』の議論が力量に基づく敵との正々堂々の対決から、ヴェージェティウスやフロンティウスに示唆された、戦場での謀略へと話題が移行するにつれ<sup>116</sup>、ファブリツィオの語る将帥の姿は次第に、マケドニアのフィリポス2世やアラゴンのフェルディナント5世の如き、創業のマキアヴェッリの君主の姿を、無意識の内に取り戻しはじめる<sup>117</sup>。そしてかかる謀略をめぐる箴言集（それはまさにヴェージェティウスに典拠を持つ）に続く本書の締めくくりにおいて、公民ファブリツィオなる仮装（それは本書の人文主義的修辞により演出された仮装である）により秘匿された、君主ファブリツィオという第二の顔が、最早隠しようもなく露呈するに至る。「古代を賛美し、また古代の重大事を模倣しない人々を非難しながら、他方で私が骨身を削ってきた戦争に関しては古代を倣わなかった」のは何故かという、コジモの本書冒頭の設問に答えてファブリツィオは言う。彼には「全くのところ機会が与えられなかったのだ」と。彼の述懐によれば「大国の君主であるわずかの人物にとってのみ」、軍隊を古代に倣って改革することはきわめて容易である。だが一介の公民として「こうした条件を持ち合わせぬ者にとって」、軍隊の改革ほど困難極まりないものは無いのである<sup>118</sup>。16世紀初頭イタリアの政治＝軍事的危機を克服するためには、「軍隊を健全に保って、確実に導く」良き公民（すなわち人間）たるのみでは不十分だ。時代に対処し得るためには自身の手で権力を掌握し<sup>119</sup>、この権力により「軍隊を作って、これに命令を下せる」、フィリポス2世やキュロス王の如き絶対君主（すなわち獣）とならなければならぬ。そして自身ひそやかな野心に燃えながら、同業者フランチェスコ・スフォルツァのように「悪行をつくしてミラノ公位に登りつめる」機会をつかめず<sup>120</sup>、「外国軍隊および私にではなく、他の方々に帰属する兵士ども」を率いる身上に止まった自身を顧み、ファブリツィオは不毛に終わったその生涯を、ため息とともに諦観するのである<sup>121</sup>。

共和国に生まれた一介の公民マキアヴェッリにとり、その生涯の野心とは自身涵養したその政治的叡智を通じ、市井に〈隠れた王〉としてこの世に君臨することであった<sup>122</sup>。

---

コルスィ』I-10の記述を踏襲している。

<sup>116</sup> 正攻法から詭計へという論調の変化は、野戦の短期決戦主義から攻城戦（野戦築城に依拠する塹壕戦を含めた）の長期消耗戦へと、素材となる戦争の質が変化したことを反映するものである。

<sup>117</sup> こうした詭計はジュミットの言う〈敵一友〉関係を踏まえて正当化させるが、かかる関係は〈友〉の内部に反射しそこにいま一つの〈敵一友〉関係を生み出すことにより、戦争の局面から政治の局面へと転用されるからである（笹倉「マキアヴェッリ再考」(1) 44～45頁）。

<sup>118</sup> 『戦術論』第7巻。

<sup>119</sup> 「大きな国があって、たくさんの臣民がいて、といった好条件が無ければならぬ」（『戦術論』第7巻）。

<sup>120</sup> 『戦術論』第1巻。

<sup>121</sup> 「それにしても自然とは苦々しいもの、私の言う方法を見届けさせてはくれないが、それを知るだけの能力は私に与えた。私は年老いたから、今日では最早何の機会も得ることはできないと思っている」（『戦術論』第7巻）。

<sup>122</sup> 村田前掲論文（下）60～61頁。また C. Vasoli, "Riflessioni sugli umanisti e il principe: Il

自身のかかる使命を実現すべく彼はその秘書官在職中、終身大統領ソデリーニに密着し、また1512年の失脚後は小ロレンツォの恩倖を希求し続けた<sup>123</sup>。だが1519年の小ロレンツォの急逝により、市井に〈隠遁せる王〉マキアヴェッリのかかる戦略の挫折は、彼自身の目にも明らかとなりつつあった<sup>124</sup>。老残の彼（1519年マキアヴェッリはちょうど50歳であった）に残されたのは、「詩や絵画、それに彫刻に見られるように」このフィレンツェの地において、政治についても「死んだものの再生」が生じるよう、自身のかち得た叡智を次の世代に伝承させることでしかなかった<sup>125</sup>。「君主であるにふさわしい無限の良き資質に恵まれたかたがた」－『ディスコルスィ』献辞においてマキアヴェッリは、「オリチェッラーリの園」に集う若公達にこう呼びかける。このような若公達こそ、『戦術論』結句において諦観の域に達したマキアヴェッリが見出す、自身の叡智の次世代における伝承者たちだ。今でこそ部屋住みの身であるものの、その出自の高貴さから言っても彼らはメディチ家の公子を除けば、フィレンツェの政治権力に至近距離に位置する人々に他ならない。彼らのうちの誰かに、かつてソデリーニがそうであったように、フィレンツェの最高権力を掌握する機会が訪れることが無いか誰が知ろう<sup>126</sup>。

『戦術論』という書物に立体感を与えるとともに、それを読み解くことを困難にしているのは、公民－君主の間で揺らぐ書き手の視点のこの多元性・多層性に他ならない（この揺らぎは対話体という形式の意識的採用により更に増幅されることとなろう）。「風景作家が山々や丘の特性を観察しようとして、平地に身をおいたり、またその反対に、低地の特性を観察しようとして、山頂に立ってみることがありますように、民衆の性質を熟知しようとするには、君主の身になってみる必要がある、君主の性質を熟知するためには民衆に身をおいてみる必要がある」という『君主論』献辞の一節はまさに、『戦術論』を解説するための「アリアドネの糸」なる一節となるのである。

（金沢大学准教授）

---

modello platonico dell'«ottimo governante»”、*La cultura delle corti*, Bologna, 1980, pp. 148-152. および石黒盛久「ルネサンス後期の『君主論』と政治プロパガンダーヴァザーリ（コジモ1世の戴冠）を解説する」『地中海学研究』XXV、2002年、129～130頁も参照。

<sup>123</sup> このようなソデリーニとの関係については石黒前掲論文「『君主論』と16世紀初頭フィレンツェの党派政治」124～123頁及び石黒盛久「ピエロ・ソデリーニ政権（1502-1512）の成立経緯と『君主論』第9章」『社会文化史学』第50号、2008年、22頁、石黒前掲論文「マキアヴェッリの政治観と諸階級の葛藤」37～40頁を見よ。

<sup>124</sup> ちょうどこの時期が『戦術論』の執筆時期であったことは、改めて勘案すべき事実である。

<sup>125</sup> 『戦術論』第7巻。

<sup>126</sup> 村田前掲論文、56頁、64頁参照。またマンスフィールド「序論」214～218頁も見よ。